chinese citron

たまご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｈｉｎｅｓｅ　ｃｉｔｒｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ６６９０Ｄ

【作者名】
たまご

【あらすじ】
恋愛経験ゼロの女子高生と、学年一のイケメンが織り成す、ちょっと切ない物語。

―1―

私には絶対に縁がないと思っていた、ひと夏の思い出。
まるで夏蜜柑のような…。

広瀬香奈、高校二年生。
恋愛経験ナシ。

明後日から始まる夏休みは家でこもりっきりになる予定だ。

みんなは彼氏とか、彼女とかと遊びに行くらしい。

俗にいうパッツンの髪型で窓から外を眺める。

みんなカップルで学校にやってくる…夏なんだからもう少し離れなさいよ…。

「香ー奈っ」

不意に後ろから抱きつかれた。
友人のちはるだ。
「夏休みなんか予定ある？」
「えっと…」
「ある訳無いじゃん、このパッツンが」
幼なじみの紗羅が香奈の席に接近しながら（ダジャレではない）言う。
「ムカ。
そりゃ彼氏とかいないから、デートの予定とかないけどさ。
でもそろそろ恋の予感！」
「妄想僻だな…フッ」
ちはるの幼なじみの志保が言った。

香奈はこの三人といつも一緒にいる。
そしてイビられる。

「もう！何でみんなして！
実はどこかの誰かから愛されてるかもじゃん。」

「あ～、ないない。」
「香奈パッツンだし。
また変な髪型になったね（笑）」
「笑うな！
短くしてくださいって言ったらこうなったのー！」
「大学デビューが良いよ」

言いたい放題だ。
冗談で言われてるのは十分承知だ。
でも、ムカつく。

「うるさいうるさいうるさぁ～い！」

そう叫んだときだった（そんなに大きな声でもないが）
三人が黙った。

不思議に思った香奈は顔を上げる。

目の前には一枚のプリントが差し出されていた。

「はい。」

クラス一、いや学年一、いやいや学校一かもしれない。
イケメンの種村大翔(たねむらひろと)だ。
バスケ部のエースで成績優秀。
同じクラスの美人、柊伊織(ひいらぎいおり)と噂がある。

正直恥ずかしかった。
学年の人気者にそんなところを見られるなんて…。

「…ありがとう」

大翔は微笑んで答えた。

「広瀬って面白いね。」

大翔が去ったあと、三人に囲まれた。

「種村君なんでこんなやつに…」

「プリント渡しに来ただけだって！」

「あれ、伊織さんと付き合ってんじゃないの？」

プリントを握りしめたまま彼を目で追った香奈には、その声は聞こえてなかった。

―2―

夜の7時くらいだったと思う。
吹奏学部に所属している香奈は慌てて帰る準備をした。
走って昇降口まで行く。

チャリ通だけど急ごう。
美人は襲われる可能性大だし。うん。
ローファーをはいていざ帰宅！

その時、目の前に大翔（ひろと）が立っていた。

「あ、広瀬。
もしかして今から帰るところ？」

もしや夜のデート？！
香奈はどきどきした。

「うん、そうだよ」

冷静のフリをしたが、ダメだったかもしれない。
声が裏返ったような気がする。

そんな事を気にもせず大翔は続ける。
「じゃあさ、途中まで一緒に帰らない？
てか家まで送るよ。
もう夜も遅いし、さ。」

願ってもないチャンス。
イケメンと帰れる。
たとえ回りから見て釣り合ってない二人だったとしても、誘って来たのは大翔だ。
「うん！」

二人で夏の夜の坂道を自転車を押しておりていった。

ああ、これが青春ってやつか。

すると大翔がふとこんな事を言い出した。

「広瀬ってさ、彼氏いるの？」

思わず立ち止まってしまった。
まさか脈アリ？！
同時にこうも思った。
どこをどう見たら彼氏持ちに見えるのか、と。

「い、いる訳無いじゃん！こんなのに！
いたら奇跡だよ…」

すると大翔も立ち止まった。

「…そうかな？」

ゆっくりと大翔の顔が近づいてくる。

僅か数秒の出来事。
でも香奈には止まった時間のように感じた。

二人が徐々に離れる。
目をあけるが、相手を見ることは出来ない。

大翔は照れ臭そうにしながら言った。

「じゃあ俺はここで。
…また…明日、な。」

夢かと思うような時間だった。
これが夢なら、どうかさめないで欲しい。
香奈はそう心の中で繰り返した。

―3―

香奈はもともと、少女漫画とか、恋愛小説とか、そういうのを好まない性格だった。
実際にこんな事があるんだったら、こんなにも苦労しない。

でも、そうじゃないかもしれない。

香奈はお風呂に入りながらあれこれ考える。

主に大翔(ひろと)の事だ。

「どうしよう、私で良いのかな？
…そんな訳無いよね。
私なんがか…はッ！
種村君もしかして酔ってたんじゃ？！」

思考回路がパンクしている。
頭の中は大翔でいっぱいなのだ。

『何言ってんの、広瀬。
俺酒なんか飲んでないし。
やっぱりお前面白いね。』

「えへへへ、そうかなぁ？
面白いことなんて…」

気付いた。

今お風呂には香奈しかいないはず。

話しかけたのは、誰？

恐る恐る顔を上げた。

目の前には、同じ浴槽に夏服のまま一緒に入っている大翔がいた。

「…疲れ目？
それとも種村君を好き過ぎての幻覚？」

そして声が返って来た。

『嬉しい事言ってくれるじゃん。』

もう一度顔を上げる。
大翔だ。
何故か夏服で。

そしてまた気付く。
自分は入浴中であること。
イコール素っ裸だということ。

香奈は叫んだ。
力の限り叫んだ。

その声を聞いた香奈の父が金属バットを持ってお風呂に入って来た。

「どうしたァ！」

勿論香奈は全面拒否。

叫びながら洗面器を投げ付けた。

「痴漢ー！」

父は失神してしまった。

「全くどいつもこいつも。
何勝手に人の体見てんのかね。」

『ごめんごめん、でももう見ちゃったし。』

「？
種村君だよね？何でここにいるの？
どうやって家に入って来たの？
っていうか何で夏服？」

大翔はしばらく黙った。

そして大翔が口を開けたその瞬間だった。

母が風呂場に顔を出した。

「あんたさっきから何言ってんの？」

香奈はまずいと思った。
高校生が一緒に実家で入浴なんて。
しかも変な状況で。

「えっと、これは、その…」

パニックになった香奈を横目に母はため息をついた。

「良い成績を残す分は構わないけど、パーになってもらっちゃ困るのよ。
さっき叫んだみたいだけど、何もいないじゃない。
お化けでも見たの？」

「…え…？」

香奈は後ろを振り返る。
そこには確かに大翔がいる。
お風呂に入っているのに寒気がした。

「今連絡網が回って来てね、あんたのクラスの種村君？
今日の夜、下校中に事故に遭ったんですって。」

香奈はもう一度、後ろを振り返った。
大翔が悲しそうに微笑んでいた。

夢であってほしい。
心が叫んでいた。

―4―

「香奈、遅かったね。」
友人のちはるが言った。

病院に到着したとき、すでに病室にはクラスメートがほとんど来ていた。

「ごめん、ちょっと考え事してて…」
香奈はそう言ってベットの方を見た。

大翔(ひろと)が寝ている。
意識不明らしいので、この表現は不適当なのだろうけど。
大翔が眠っていた。

香奈は胸が苦しくなった。

あの後…私と別れた後に事故に遭ったんだ。

涙が出そうだった。

ふとベットのそばに目をやった。

伊織(いおり)が大翔の手を握って座っていた。

また、胸が苦しくなった。

『触るな。その手を離せ。』

びっくりして振り返ると、そこには大翔がいた。

「…っ、触るななんてそんな…！」

病室の空気が凍った。

みんなに大翔の姿は見えないようだ。

イコール今言ったことは香奈の独り言となってしまう。

やばい。香奈はパニックになった。

伊織が香奈をにらみつけながら言った。

「…それ、あたしに言ってんの？」

「いや、そういうつもりじゃ…」

『そーだよ。』

「そーだよって…」

また空気が凍った。

伊織は確かに抜群の美人だ。
でも怒らせると、ひょっとしたらその辺の先生達より恐いかもしれない。

香奈以外のクラスメートは逃げるようにすばやく、でも気付かれないようにそっと帰っていった。

「伊織さん…これは、その…」

「香奈は大翔の何なの？」

言葉が詰まった。

クラスメート。
たまたま今日一緒に帰って、キスをしただけ。
付き合い始めたわけではない。

『彼女だよ』

「そんな彼女だなんて…」

香奈は照れながら答えた。

そしてヤバイと思った。

他の人から見たら私アホだ。
ピン芸人にだって負けないかも。

伊織はため息をついて立ち上がった。

「香奈妄想僻あるらしいし。
じゃあゆっくり二人の時間楽しんで。」

余裕の笑みだった。

香奈はひとまずホッとした。
何故か何かのゲームのラスボスを倒した気分だ。

病室には香奈と大翔以外誰もいなくなった。

―5―

夜の病室。

横たわっているのは最愛のひと。

横に立っているのも最愛のひと。

どんなドラマだよ、と香奈は思う。

何が起こってこうなったかはわからないが、どうやら大翔(ひろと)は幽体離脱をしているようだ。

『広瀬、俺の手を握ってくれないかな。
さっき柊(ひいらぎ)がしてたみたいに…』

大翔が言った。

「…うん」

香奈は言われたとおり、伊織(いおり)がいた所に行き、大翔の手を握った。

「…大丈夫だよ。私がこの手を握ってるから、大丈夫。
早くなくていい。どれだけかかってもいい。

だから…目をさまして…」

大翔は胸が詰まった。
涙さえ出て来そうだった。

香奈に触れたい。

でも触れられない。

大翔はたとえ触れられなくても、香奈を後ろから抱きしめた。

「…こんな感じで良いのかな？」

香奈が照れ臭そうに言いながら振り返った。

そして、唇と唇が触れた。

大翔は俗に言うおばけだ。
触れることは出来ない。

でも今のは、誰がどう見たって「キス」だ。

香奈は真っ赤になった。
大翔が笑う。
『2回目だ』
「なッ！違う！
今のは事故、事故！
大体触れてないし！」
その時香奈はまずいと思った。
大翔はこの状態を辛いと思ってるかもしれないのに。

「ごめん、今のは冗談。
…恥ずかしかったの…」
大翔は香奈への想いが募った。
彼女に恋をして良かった。
大翔は胸が温かくなる感じがした。

「そもそも、何で私なの？
伊織さんと噂あるし…」

大翔が険しい顔をした。

『噂。噂だろ？
俺は正直柊は好きじゃない。
俺は…広瀬、お前が好きなんだよ。
だから今こうしてそばにいる。』

最後は照れ笑いをした。

香奈は不思議に思った。
どう考えても、イケメンアイドルグループに入れそうな人だ。
何でこんなコンプレックスの塊に…。

大翔があれこれ考えている香奈を見て微笑んだ。

『理由、知りたい？』

「…うん。」

『じゃあちょっと長くなるかもしれないけど、聞いてね。』

大翔は天井を見上げて話し始めた。

―6―

あれは6月くらいだったと思う。
クラスでいじめられている子がいた。
主犯は柊伊織（ひいらぎ いおり）。
彼女が気に食わなかったようだ。
クラスの女子は柊には逆らえなかったから、いじめに加わった。

でも、広瀬だけは違った。
いじめに加わらないで、彼女に話し掛けに行った。
大丈夫？元気ないね。
せっかく可愛い顔してるのに、笑わないともったいないよ？
ね、これから一緒にいる？
私変なヤツって言われてるから、意外に面白いかも。
幼なじみが励ましても笑わなかった子が、初めて笑った。

『その時思ったんだよ。
ああ、この娘は他の人と違う。

温かい心を持ってる、ってね。
で、感じたんだよ。俺にはこの娘だ、って。』

香奈はそれを聞いてはっとした。
ちはるの話だった。

『人間見た目じゃないんだよ。』
大翔（ひろと）の言葉に香奈はちょっと頭に来た。
「ムカ。
そりゃ私は可愛くないけどさ…」
大翔が笑った。
『アハハ、そうじゃない。
確かに柊はキレイだと思うよ。
でもあんなに性格悪いんじゃ…な。
俺はあの時から広瀬が気になってたんだ。
そしたら木下（ちはるの事）を助けたお前がウザかったみたいで、
柊はターゲットをお前に変えたんだよ。
だから俺はあいつが大嫌いなんだ。
…それに俺、広瀬可愛いと思うよ。』
顔がかなり熱くなった。

こんなにかっこいい人から、こんな事を言ってもらえる。
大翔が言ったみたいに、人は外見ではないのだろう。
でも彼は、澄んだ心を持っている、温かい人なのだ。

香奈は立ち上がった。
「ま、まぁ私が可愛いのは今更わかった事じゃないし！
でも…私は…」

その時、目の前の壁に手がのびて来た。
大翔だった。
恐る恐る振り返ると、状況は一変。
迫られていた。
香奈は心臓が爆発しそうになった。
大翔には実体がないから、香奈は逃げようと思えば逃げれた。

でも、逃げれなかった。

大翔が泣いている。

『…どうして俺は広瀬に触れられないんだろう。
こんなに想ってるのに…』

香奈は胸が苦しくなった。

「…私も、種村君に触れたい。
私だって、種村君の事想ってるよ。」

素直な気持ちを打ち明けた。

とたん、大翔が笑い出した。

『言ったね？』

やっと香奈は気付いた。

はめられた！

大翔がさっきとは違う感じで迫って来た。

大翔が大人の男に見える。

着ているのはうちの学校の夏服なのに、色気さえも感じる。

「なっ、なっ、なっ、何でそんな事するの！
さっきの嘘泣きは何ー？！」

大翔がまた笑った。
いつもの屈託ない笑い方と違う、大人な感じで。

『広瀬、ここ病院なんだから静かにしなきゃ。
それに俺がこんなに気持ちを伝えても、広瀬返事くれないんだもん。
じれったくてさ。』

逃げようと思えば逃げれる。

でも逃げれないのは、見つめ合ってるから？

もう一度、唇と唇が近づいた。
今度はお互いが接近しながら。

「あら、同じクラスの子？
夜遅くにありがとうね。」

大翔の母だった。

香奈は心臓が止まるかと思った。

大翔の母に大翔の姿は見えない。

香奈は自分がどんな顔をしてて、それを見た大翔の母がどう思っているのかを考えただけで、胃が痛くなった。

―7―

家に帰って来た香奈は、湯舟に浸かりながら、ぼんやりと考え込む。

もし、種村君が目をさましたら、私たちは付き合うのだろうか。
それは嬉しいけど…今日みたいに迫られるのだろうか。
大人の男の人みたいに迫って来て、私は抵抗できなくて、あんな事やこんな事を…

「ぐはー！」

香奈は風呂で溺れそうになった。

『！
うっわ、マジびっくりした…広瀬、急にどうしたんだよ。』

当然のように大翔（ひろと）が一緒に湯舟につかっている。
もちろん、夏服を着たままで。

香奈は体操座りをして余計な部分が見えないように頑張った。

「考え事してたの。
それより何で当然のようにここにいるのよ。」

『俺と広瀬の仲だし。
てかさっきも風呂入ってたけど、また入るんだね。
風呂、好きなの？』

「…さっき、入ったっけ…」

香奈にはこの数時間の出来事が、何日間にも渡って続いている出来事のように感じた。

まだ、一日も経っていない。

好きな人と触れ合えない時間というものは、こんなにも長く、辛く、残酷なものなのだと知った。

『広瀬？
早く体拭かないと風邪引くよ？』

ようやく自分の状況に気付いた。

「な…何を見た！何を見た！」
慌ててバスタオルで身を隠す。
大翔はさっきと違う、屈託のない笑顔で返事をした。
『何って…全部？』
香奈は真っ赤になった。
「もう嫁にいけない…」

嫌な予感がした。
何かが接近してくる。
そんな予感。
やはり大人モード（？）になった大翔が今にも襲って来そうだった。

『やべ、広瀬。
奪っちゃいたい…』

わかる。
言いたいことは何となくわかる。
でも、わからない。

「ななな何言ってんのかな？
私にはさっぱり…」

「母さんにもさっぱりだよ。
あんた最近やっぱりパーになったんじゃないの？」

香奈は母からクルクルパー姫の称号をもらって屈辱的だったが、大翔との危険な状況を切り抜けられたので、一安心した。

大翔は自分の手を見つめた。
早く体に戻りたい。
何故、自分は元に戻れないのか。
もしかして、死んでしまうのか。
好きな人に触れることも無く。
不安だけが募っていった。

深夜、寝ようとした香奈がその異変に気付いた。

「…種村君、どうしたの？」

大翔は不意をつかれた感じがした。
『ん、いや、別に…。
それよりさ、一緒に寝ていい？』
「またそんな…何されるかわかんない状況…で…」
香奈は言葉を濁した。
大翔が真っすぐ見つめて来たのだ。
何か事情があるのかもしれない。
「…良いよ、こっちおいで。」
香奈は大翔をベットに呼んだ。
内心心臓が口から出て来そうだった。
『…広瀬、ぎゅってしてもらって良い？
触れないから難しいかもしれないけど…』
香奈は何も言わず、ただ大翔を優しく包み込んだ。
大翔は顔を上げた。

香奈が微笑んでいる。

彼女の優しさに包まれて生きていきたい。

大翔はそう思った。

香奈が寝息を立て始めた頃、大翔は静かに涙を流した。

まだ、死にたくない。

―8―

大翔(ひろと)が事故に遭って一週間が経過した。
大翔が目をさますことは無く、ずっと香奈のそばにいた。

夏休みに入り、暑さが増してきた。
香奈は毎日病院に行った。
何故彼は体に戻らないのか。
その疑問だけがいつも残る。

「ねえ、どうして体に戻んないの？
触れたりしたら戻れるかもしれないのに…」

大翔は怒りが込み上げて来た。
自分だって一日も早く戻りたい。
一日も早く彼女に触れたい。
なのに。

『わかったような口をきかないでくれ！』

香奈は思わず立ち止まった。
今まで見たことのない剣幕だった。

「ごめん！そんなつもりじゃなかったの！
一日も早く元気になって欲しいなって思って、私なりに方法を考えてみて、それで…」

香奈の目から涙が落ちた。

自分は何て軽はずみな事を言ってしまったのだろう。
大翔がどれほど傷ついた事か。
今までも知らないうちに人を傷つけていたのかもしれない。

自分の愚かさが悲しかった。

大翔もきまりの悪さを感じた。

好きな人にやつあたりするなんて。

そしてまた、彼女がこんなに自分の事を思ってくれているのを知り、

胸が締め付けられる感じがした。

『…ごめん、そんなつもりはなかったんだ…。
広瀬を泣かせるなんて…最低だな、俺。』

大翔はそっと香奈に近づいた。
そして香奈を抱きしめた。

『もう二度と広瀬を傷つけたりしない。
泣かせたりしない。
だから…これからもそばにいさせて？』

香奈の涙は止まらなかった。

「…っ、また、さっきみたいに、傷つけちゃうかも…っ。
私が…私のせいで…」

大翔は強く香奈を抱きしめた。
例え触れられなかったとしても。

『もう泣かないで。

俺は、お前の笑顔を見てたいんだ。』

気持ちの整理がついた後、香奈達は帰宅して、いつものように湯舟につかった。

思えば一週間前、今みたいに大翔が湯舟につかっていた。
それから不思議な日々が続いた。

霊感があるわけでもなんでもない。
ただの女子高生なのだ。
でも大翔が見える。

はっきりと。

『それは俺と広瀬の心が通じ合ってるからじゃない？』

大翔が言った。

「…そうだと良いな…。」

心が湯舟みたいに温かかった。

―9―

日曜日、二人でデートすることになった。
でも他の人には大翔(ひろと)が見えないので、劇団ひとりならぬデートひとり状態だ。

「うう、クラスの人に見られたら恥ずかしい…」

『何で？』

大翔は笑顔で返す。

「デートひとりなんてイタイ子じゃん！
それに伊織(いおり)さんが…」

香奈は伊織と病院の独り言事件以来、気まずい関係になった。

『気にするなよ、柊(ひいらぎ)なんて。
何があってもお前は俺が守る。約束。』

「…うん！」

二人は笑顔で歩き出した。

いろんな所に行ったせいか、日が傾き、夕方が近づいて来た。

「今日も一日疲れたなぁ…。
でも、楽しかった。」

『俺も。
退院したらまた行こうな。』

「ん…」

ちょっぴり恋人らしくなってきたなと感じたとき、その空気を壊す者がやって来た。

柊伊織である。

背筋がぞっとするように冷たく、でも美しい笑みを浮かべながらやって来た。

「何、やってんの？」
香奈は思わず目を反らした。
「何もないよ…」
「最近大翔のとこに毎日通ってんだって？
何してんの？」
伊織が近づいてくる。
香奈はあとずさりをした。
「や、お見舞いに…」

伊織の足が止まった。

「ふーん。
そうだ。いい人紹介してあげる。
香奈彼氏欲しいって言ってたよね？
この人香奈が好きなんだって。
オメデト、お似合いだと思うよ。
…ごゆっくり。」

そう言って伊織は去っていった。
やって来たのはやたらとでかい人だった。
一言では表現しにくいが、ホラ、あれだ。
生理的に受け付けないタイプだった。

「ぼ、ボク、前から広瀬さん好きでした！
ボクと付き合ってください！」

嫌だ。答えはもう決まっている。

でも逃げれない。

不覚にも捕まってしまった。

男が襲い掛かって来た。

「！いや！やめて！
種村君、助けて！」

そこに大翔の姿はなかった。

―10―

伊織(いおり)は本気でこんな奴と私がお似合いだと言っているのか。

香奈は必死に抵抗しながらそう思った。

じゃあ、もう種村君には会えない。

こんな奴とお似合いの私なんて…。

「や…やめて！手を離して！

種村君…！」

「種村は入院中じゃないですか。

しかも柊(ひいらぎ)さんとデキてる。

だから広瀬さん、あんなヤツ忘れてボクと…」

香奈はぎゅっと目を閉じた。

もうダメ…。

その時だった。

メリッという音がした後、ズサーッという漫画でありがちそうな音がした。

香奈はそっと目を開けた。

そこには男を蹴り倒したらしい大翔(ひろと)が立っていた。

今までと違うのは、半透明では無いところと、夏服のシャツのボタンが全部あいていたところだ。

「ごめんな、遅くなって。
お前があの男に言い寄られたとき、どうにかしなきゃ、って思ったんだ。
広瀬を助けたいって強く思ったら、気付いたら病院だった。
さすがに入院してるときの服じゃ恥ずかしいから、慌ててこれ着て来たわけ。
別に見せようとして全開で来たんじゃないからね？」

大翔は笑いながら言ったが、すぐ真剣な顔付きになった。

香奈の目から涙が落ちて来たのだ。

大翔はそれを優しく拭ってやった。

温かくて柔らかい肌。

自分の指に温かい涙がこぼれてくる。
それがくすぐったいほど嬉しかった。

そして、大翔は力の限り、強く強く香奈を抱きしめた。

「やっと触れられたな…」

そして香奈の唇に自分の唇を重ねた。

初めて唇を重ねたときとは違う、長い長いキスだった。

「…もう、二度と離さない。」

夏休みが始まって、しばらくしてからの事だった。

―11―

香奈は夏休み、出来る限りずっと大翔(ひろと)と過ごした。

大翔は退院したばかりだから、しばらく部活に出なくて良いらしい。

二人でいろんな時を過ごした。

海に行った。

綺麗な夕日を二人で眺めた。

買い物に行った。

お揃いのペンダント、ずっと付けておくことを約束した。

大翔の家に行った。

初めて肌を重ねる事になったわけだが、大翔が例の大人モードではなかったら、多分香奈はパニックになっていただろう。

二人は濃厚な時を過ごした。

今までお互いがじれったく感じた分、ずっと触れ合っていた。

そして九月、二学期が始まった。

香奈はいつものようにちはる、紗羅、志保に囲まれていた。

「あんた…ちょっとキレイになったんじゃない？」

「え？ホントに？うわーい！」

「恋でもしてんの？
恋するオトメはキレイになるって言うし。」

「やーだ、もうキレイだなんて！」

「小綺麗って言った方が正しいかもね。プ
ま、人並みに目が当てられるようになったかな。」

「なッ！」

「夏休み連絡取れなかったし、どうせ引きこもってたんでしょ。
この根暗ァー。」

言いたい放題だ。

香奈はもう限界域に達した。

「うるさいうるさいうるさぁ～い！」

夏休み前と同じように、三人が黙った。

顔を上げてみると、一枚のプリントが差し出されていた。

「はい。」

大翔だ。

「…ありがと…」

大翔はクスッと笑って香奈の首筋に手をのばした。

大翔の手によってお揃いのペンダントがスルスルと出てくる。

「ちゃんと付けてたんだ。」

「…ん、まぁ…。」

大翔が香奈の頭に手をのばし、引き寄せた。

大翔のカッターシャツから同じペンダントが出てくる。

友人三人は絶句した。

大翔はそんな三人を横目に香奈のおでこに軽くキスをした。

「また後で、な。」

「うん。」

この後香奈が友人三人だけでなく、クラスの女子（伊織（いおり）以外）に囲まれたのは言うまでもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6690d/

---

chinese citron

2010年10月8日21時33分発行